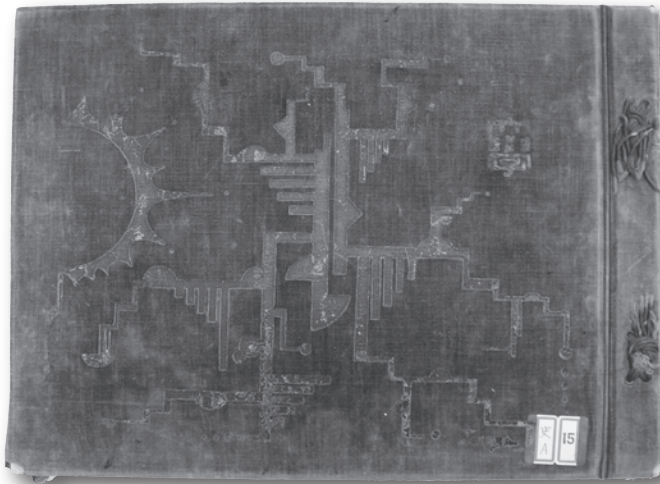


東京大学史史料室ニュース

第46号 2011・3・31

目次

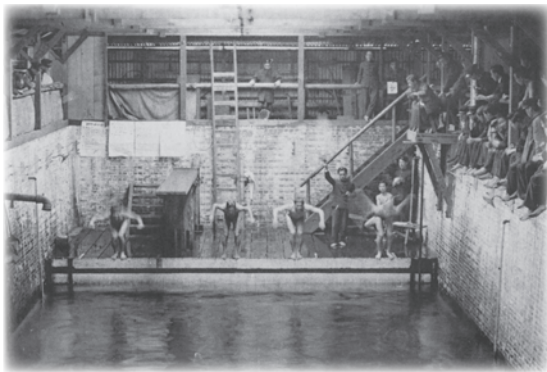
| | |
|------------------------------|---|
| 東京大学教員の文部行政参画..... | 2 |
| 東京大学総長外山正一について一日記類の翻刻から..... | 4 |
| 受贈図書一覧..... | 6 |
| 史料室日誌抄録..... | 8 |



写真帖 縦265mm×横365mm×厚18mm
表紙素材：ベルベット地（グリーン）



▲三四郎池藤棚でまどろむ風景▲



▲第二食堂地下プール完成以前の学内プール



▲御殿下でのスキー風景▲

所蔵史料の紹介

1930（昭和5年）度の大学風景（『法学部卒業記念写真帖』1931.3より）
当室では他に、同じ年の『経済学部卒業写真帖』、古いものでは1899（明治32年）度『IMPERIAL UNIVERSITY OF TOKYO 東京帝国大学写真帖』、1908（明治41年）7月11日発行『法科大学卒業写真帖』、1910（明治43年）発行『医学部記念帖』などの写真帖を所蔵しています。

はじめに

近代日本の文部官僚の履歴や活動をみると、文部官僚が直轄学校関係職（教員、管理職）を歴任し、直轄学校関係者が文部本省職（兼任を含め）を経験することが多々確認できる。そもそも文部省と直轄学校の間には人的な面で厳密な境界を引くのは難しい。

東京大学と諸官庁との関係は、主に学閥の側面から言及されることが多く、とりわけ教員は、紹介、推薦を通じて卒業生の配属に影響を及ぼす存在としてよく知られている。しかし、明治40年代に山路愛山が述べているように、文部省は、「省中悉く学閥の徒たるのみならず、帝国大学其ものが常に文部省の小舅となりて逆まに文部省を支配しつゝ、あるの形あるは傍人をして真に気の毒の情に堪へざらしむ。…文部省は大学派の全然併呑したる所たるのみならず、文部省に在りて官吏たらんものは大学の歡心を失ふときは一日も存在し得べからざるの状態なるを以て文部省の重役たり得るものは独り大学出身者に限る勢」（『行政官吏の学閥と各省の気風』『太陽』第15巻第8号、1909年6月）で、他の省庁とは違う様相を示していた。こうした山路の言葉は、卒業生主導のリクルートに限らず、大学を文部省の出先機関とし、大学と文部省を確定的上下関係とみなす見解にも疑念をいだかせる。

そこで小文では、直轄学校関係者、特に東京大学関係者が文部行政に直接・間接的に関与する形態について、いくつかの史料を紹介することでその多様な姿を浮き彫りにしたい。

1、文部本省職の経歴

東京大学や帝国大学関係者が所属している学校業務を超えて一定期間文部行政に本職あるいは専任として関与するケースは、明治30年代半ばまで持続的にみられる。

1880年から1905年まで文部省専門学務局長に在職した人物のなかで、浜尾新、木下広次、菊池大麓、松井直吉、上田万年はその前職が東京大学教員や管理職であり、退官後帝大総長や文部次官、帝大教授になった。明治中後期の専門学務局長は、専門知識をもつ東大・帝大教授から選任されるのが一般的であったと評価することができるだろう。この状況は、1905年以降福原鏝二郎ら法学専攻の事務官出身者が就任することでかわっていく。

また、兼任や兼勤という肩書で文部行政に関与するケースも多い。文部省定員は官制によって規定されるが、人材・人力不足を補う抜け道として常に兼任・兼勤者が当てられ、文部省職員全体の50%を占める時期もある。兼任・兼勤先の多くは専門学務局や図書課であったことから専門的な知識が評価されていたと推測される。

学校長や教授を本職とする者が兼任する文部本省内の官職は、1899年を境にして変化がみえる。それ以前には参事官、書記官欄にも兼任者の名前が並べられていたものの、その後は、陸軍教授牧瀬五一郎をのぞいて、視学、図書関係などの専門職に限られている。

それでは、帝大教授の身分を保持しながら、文部行政職に就く人物は、どのように評価されていたのであろうか。人物評論家の藤原喜代蔵は、国文学者として有名な

上田万年について次のように述べている。

経歴に徴して考ふるに、彼〔上田万年〕は初より学問界殊に官学界に出身し、行政官に転ずる時と雖も、尚且つ隻足を学問界に置き、常に学者的立場脚地を離れざりしものといふべし…然らば上田が今日の大を致したる所以は、決して純乎たる学者としての結果にあらざること明かなり。其原因は他にありて存す。他とは何ぞや。言ふ迄もなく、彼が政治家的資質を具へ、行政家的才幹を有することこれなり。彼が外山正一の推薦を得て、沢柳政太郎と共に文部省の局長となりしは、彼の行政的才幹が先輩外山によりて識認せられたるが為也。而して彼が大学を去りて文部省へ入ることは、外山以外の先輩の多くが賛成せざりし所にして、菊池大麓の如きは彼の為に辞退すべきを勧めたりと伝へらるゝにも拘らず、彼が決然として文部省に入りたるは、外山の厚意辞み難きものありしにも困るべしと雖も、亦一にも彼が行政に対して天性相当の趣味と野心とを有するが為にも困らずんば非ず（『上田万年——学者的政治家か政治家的学者か』『人物評論学界の賢人愚人』1913年）

上の文章から、藤原が学者の行政職への就任を冷やかな視線でみていたことがわかる。このような観点は、上田万年の伝記でも同じで、文部行政に関係する部分が少ない紙面でしか書かれておらず、軽く扱われている。これは明治期に活躍していた人物の伝記類に共通してみられる傾向である。

2、文部行政の審議

現在でも東京大学教員には文部科学省関連事業だけでなく、中央省庁事業の審議や諮問のメンバーとして関与している人が多いが、明治時代にもそのような傾向がみられる。

ここで指摘しておきたいのは、東京大学教授の文部行政への関与が文部省側から組織的に決められていたことである。文部大臣諮問機関として1897年に高等教育会議が設置される以前の段階で、文部省から出された二つの史料を紹介しよう。

一つは、「文部省小集復旧之件」という題名で、東京大学史史料室所蔵の『文部省往復明治十六年分』に含まれている史料である。

専学第二百十六号

従前文部省小集ト唱へ、文部卿輔各局課長直轄学校等主長及東京大学教授等、毎月一回若クハ毎年四回会集之定例有之。去十三年中ヨリ一時停止相成居候処、今回更ニ隔月一回ツ、右集会ヲ復スヘキ衆議ニ有之。且其会員者、本省卿輔書記官直轄各学校等主長教授助教教諭等、總テ奏任以上之分并本省或ハ学校等出勤准奏任御用掛（文部省御用掛或ハ東京大学教授等之内他官衙ヨリ兼勤之向ハ暫ク之ヲ除ク）ト相定、各位臨席相成度期望ニ候条、貴学出勤之面々へハ貴官ヨリ可然御通知有之度候也。

明治十六年四月廿六日

専門学務局長
文部大書記官浜尾新印
普通学務局長
文部大書記官辻新次印

東京大学總理加藤弘之殿

ここでは、1880年まで文部卿、輔、各局課長、直轄学校長、東京大学教授らが毎月1回あるいは年4回定例で会議を開いていたこと、その後中断していたこのような会議を1883年から2ヵ月に1回、再開しようとしていることがわかる。再開される会議は「直轄各学校等主長、教授、助教授、教諭等總テ奏任以上」と「准奏任御用掛」が対象とされ、以前より関係者の範囲が広がったことも看過することができない。会議の具体的な内容や学校関係者の活動はさらなる史料調査をまたなければならぬが、学校関係者を含めて頻繁な定例会議を開いていたという事実や開催の必要性を文部省側が感じていたことは注目すべきであろう。

もう一つは、1892年12月27日文部次官久保田讓から帝国大学総長加藤弘之宛に通牒された省務諮詢規程である（東京大学史史料室所蔵「文部省省務諮詢規程」『明治二十五年秘書附緊要書類』）。

省務諮詢規程

- 一 大臣ニ於テ省務ニ関シ諮詢ヲ要スルトキハ次官以下本省各部又ハ其一部ノ高等官ヲ会集シ意見ヲ述ヘシム
- 一 必要ノ場合ニ於テハ直轄各部高等官モ亦会集セシム
- 一 諮詢事項ノ種類ニ依リテ便宜属僚ノ意見ヲ聴クコトアルヘシ
- 一 諮詢ノ事項及日時ハ大臣之ヲ定メ其事務ハ秘書官ヲシテ之ヲ掌理セシム

定例会議ではなく、省務に関する諮詢のなかで必要な場合という限定はあるものの、直轄各部高等官すなわち直轄学校の教員などの意見を聴取するために大学側に協力を要請している。

3、海外派遣・調査など

学校関係者の文部行政関与の形として最後に注目したいのは、出張である。国内で他の学校を視察することはもちろんであるが、海外への長期出張・派遣を分析することは文部省の政策立案や海外教育事情の情報収集ルートという側面からも重要であろう。

近代の文部省史料が焼失している現時点で、出張関係の書類は公文書館所蔵の任免史料に頼らざるを得ないが、個人書簡のなかにも簡単な報告を兼ねている史料が散在している。

例えば、東京大学幹事兼農商務省御用掛として1884年米国ニューオーリンズ万国工業兼綿百年期博覧会の事務官になった服部一三は、博覧会参加後にヨーロッパで学事視察を行っている。

服部がアメリカ滞在中の1885年1月15日に妻宛に送った書簡には、日本の出品が博覧会で第一等との評判を受けているとの成功譚を伝える一方で、当地は学者が少ないため速やかにヨーロッパに行きたいと述べている。なお、当地の大統領が代わる時期で役人もだいたい3月過ぎには代わるため、勉強する役人がいないとしている（兵庫県公館所蔵「289 米国より近況報告書状」『服部一三知事関係資料』）。

その後、イギリスを経てフランスパリで学事調査を行っている様子が辻新次（当時、内記局兼学務二局長）

宛の書簡で伝えられている（国会図書館憲政資料室所蔵「26 - 2 服部一三書簡」『辻新次文書（原文書）』）。

拝啓益御多祥奉賀候。陳ハ小生儀も暫時英国ニ滞在該地ノ学事モ大略取調候故、四五日前当府へ着致シ直ニ当国ノ学事景況ヲ取調ヘニ取掛リ申候。文部卿並ニ商務卿ニ面会候処、何レモ取調ヘノ為メ十分ノ便利ヲ与ヘ呉レ、既ニ今日ハ文部省ノ内局ヘ参リ、局長ニツキ該局ノ事務章程等ノ説明ヲ受ケ申候。御承知ニモ有之バク候ヘドモ、当国文部内局長ノ権ハ意外ニ盛ンなるものニ有之候。是レより順次諸局長ニツキ其局ノ事務説明ヲ受ケ候事ニ約束致シ置申候。然シ小生ハ仏語ヲ解セズ候故、通弁人ヲ頼マザルヲ得ス、是レニハ因却仕候。当国よりベルジウム其他ノ諸国ヘ参候故、十二月ニ至ラザレバ帰朝ハ六ヶ敷御座候故、此段御含ミ置奉頼候。頓首
仏国パリ一府一三
辻老臺下

服部がアメリカを出発してヨーロッパに向かったのは1885年7月11日で、翌年の1886年1月8日に帰国することから、この史料はその間に作成されたものとみられるが、パリに到着して4、5日しか経っていないにもかかわらず、フランスの文部卿、商務卿に面会を終え、書簡を送る当日に文部省局長への面談が決まるなど、旺盛に当地の文教官僚に会って、調査を行っていたことがうかがえる。

このような活動や経験が、帰国後まもなく文部省書記官（1886年3月）になり、その後は普通学務局長として在職し、文部行政にたずさわるなかで影響を与えたことは想像に難くない。東京大学の前身校の一つである第一高等中学校の教諭兼文部属であった寺田勇吉が会計局長久保田讓の欧米出張に随行して1889年から約11ヵ月間、往復の日数を除くと7～8ヵ月間教育事務の調査にたずさわり、その後、文部省の文書課長、統計主任、参事官、書記官など教育政策の面で活動していくことなど、教員が文部省職務を兼任し、徐々に文部官僚に転じていく際に、このような海外出張や調査事業が大きな機縁であったことは容易に推察できる。

補足であるが、東京大学史史料室所蔵の「留学生関係書類」には教員の長期出張の申報書類が見当たらなかった。その代わりに、「文部省往復」の中にさまざまな博覧会の書類が含まれており、文部省が海外の学会や会議、博覧会に参加する上で東京大学に物品や人材の派遣を依頼していた様子がうかがえる。

おわりに

鈴木博雄は、維新直後の文人型文部官僚から教育法制の専門家としての文部官僚が形成されていく過程を指摘している。（『明治期文部官僚の形成過程』『日本近代教育史の研究』1990年）。そのなかで、文部省設置当時の文部官僚と学制取調掛のメンバーを通じて、辻新次、中島永元など学者とは違った経歴を持つ人たちによって、教育行政を担う文部官僚グループが形成されてきたとし、明治初期の段階で教育家（学者）と官僚（事務官）との区別が行われていたかのように文部行政の担い手像を描いている。しかし、小文で見えてきたように明治中期にも学校関係者は本職・兼職、会議や出張などさまざまな形で文部行政に参画していったのである。

（じょん・ひょんじゅ：京都大学文学部非常勤研究員）

東京大学総長外山正一について — 日記類の翻刻から —

山口理沙

はじめに

東京大学総合図書館に所蔵されている外山正一（1848～1900）にまつわる史料は東京大学大学史史料室の前身、東京大学百年史編集室において1975年、1976年に整理がなされている。また、それより先に、同図書館元職員の柳生史郎氏による整理も一部試みられていた（詳しくは、柳生史郎・1976-1978.「外山正一の日記（1）-（21）」『UP』東京大学出版会）。それらをふまえたうえで、1977年に東京大学百年史史料室より、目録が刊行されている。文書類を、「原稿類」、「草稿類」、「演説原稿」、「冊子草稿」、「日記」、「書翰」として、そしてその他を「雑」として分類している。なお、これらは東京大学総合図書館において貴重図書として保管されている。これらのなかから、現在、日記類の翻刻作業を行っている。その中間報告を以下に提示してみたい。

初代文学部長、第四代帝国大学総長、文部大臣として

これまでにも本誌において外山正一は提示されている（例えば、谷本宗生・2010.「戦前期の大学総長の人物像について—濱尾新・外山正一・長興又郎の逸話—」『東京大学史史料室ニュース』第44号を参照されたい）。なお、ここでその人物についてまず触れておきたい。

嘉永元（1848）年に幕府の大番士の家庭に生まれ、文久元（1861）年には蕃書調所に入学している。その後、句読教授、教授手伝並出役を経て、教授方になっている。幕命により英国留学を果たし、明治元（1868）年には静岡学問所教授となっている。明治3（1870）年に外務省弁務少記として渡米するが、依頼免本官し、学生として、アンナバー高等学校、ミシガン大学選科入学を果たしている。明治9（1876）年に帰国し、東京開成学校五等教授、さらに明治10（1877）年東京大学文学部四等教授となり、文学部唯一の日本人教授となる。文学部長を兼任し、さらには、明治19（1886）年東京大学総理事務取扱、つづいて帝国大学総長事務取扱となる。その後、明治31（1898）年には文部大臣となっている。約二ヶ月後の内閣総辞職による辞表提出ののち、精力的に各地での講演をおこなったが、肺炎、中耳炎併発により世を去った。

「社会学」の濫觴

帝国大学において、ソシオロジー（Sociology）は、明治14（1881）年より、お雇い外国人教師フェノロサによって独立の学科目として始まった。はじめは、「世態学」と称されていたこの学問に「社会学」の用語を宛がったのは外山だと考えられている。（詳しくは、『東京大学百年史 部局史1』を参照。また、天野郁夫・2005.『学歴の社会史』平凡社.p.17.）。明治10年には、東京大学文学部四等教授となり、唯一の日本人教授となった明治26（1893）年、講座制が導入されるにあたり、社会学講座担任として就任していることが、『帝国大学一覽』から確認することができる。講義は、アメリカ留学時代に傾倒したスペンサーの社会進化論を重んじたものであった。

しかしながら、外山の関心が社会学に特化したものではなく、より学際的な関心で社会を見つめていたことは

日記類を鑑みても分かる。

日々の記録

前述のようにここで取りあげる日記類は、『日記』、『日記及覚書』、『草稿及日記』、ほか手帳として東京大学総合図書館にて保存されている。そのなかでも、現在作業を行っている『日記（日記1）（明治13年2月12日～明治17年）』と『日記及覚書（日記2）（明治14.8.18～明治18年6月17日）』を紐解いてみたい。この二つの冊子は、ともに和綴じとなっており、外山は墨書きによって記録を残している。枠内のみならず、枠外にも覚書等が見受けられる。ときに強調の意味を持って朱書きがみられる。

じつのところ、『日記（日記1）』には東京大学に関する直接的記述が確認できない。東京大学のことよりも、新聞の記事、時事問題について多くを割いている。なお、『日記及覚書（日記2）』において大学についての記述が登場してくる。そのため、『日記（日記1）』こそ覚書の性質を含んでいると判断することができる。『日記（日記1）』には、年月日の記述が記されているが、すべて西暦によるヨーロッパの記述方法（日/月/年）に依拠している。

つぎに、冊子のタイトル『日記及覚書（日記2）』に倣い、日記的要素、日々の記録と、覚書について詳しく触れてみる。まず、日々の記録として外山は各紙の主なニュースを記録している。これは、『日記1』『日記2』ともに確認できるものであり、おもに報知新聞と日日新聞について、まれに讀賣新聞について触れている。『日記1』と『日記2』のころ、外山がとりわけ中長期的に関心を示していたこととして、開拓使問題が挙げられる。新聞各社がこの問題については大きく取り上げており、については、御前会議、ひいては、国会開設の時期の詔勅へとつながる出来事であった。外山も例外ではなく、一連の事件について事細かに触れている。

『日記2』に入ると、日記の冒頭にてその日の天候を綿密に書き記すことを忘れることはほとんどなく、その日の天候も複数の変化について記している。通常は雨天に注目したものであるが、季節の変わり目にはより詳細な天候についての記述となる。『日記2』の明治14年8月31日には、「朝晴ル 此日迄テ南風ナリシ処此日ヨリ北風ニ変ズ 三時頃雨降り雷鳴ス 夕刻ニ至リ又晴ル」とあり、翌9月1日の日記を紐解くと、「晴北風今日ハ百十日ナリ」と、暦と連動した天候の記録がみえる。

また、外山は日々の出宅時間と帰宅時間を記録している。おおむね午前7時半に自宅を出て大学に赴き、午後の早い時期に帰宅、そのあと学外の活動にあたるようである。そのほか面会者、手紙の記録も怠らない。このように日常についての記録は非常に細やかに残されている。これらは感情的ではなく、日誌の傾向を多く持つものであるようにも見受けられる。もちろん、新聞記事への個人的見解なども記載されていることから、日記的側面も見受けられる公私にわたる記録と考えられる。

当時の世相、もしくは歴史的事実についての析出は、す

でに前述の柳生によって翻刻が試みられている。ここではとりわけ東京大学における関わりについて焦点を当ててみる。

明治14年9月2日には、

朝晴 東京大学ニ諮詢会惣会アリ出会ス来学年ヨリ文学部中就中政治学科中ニ變革アルガ為ニ学生中或ハ新規三年科ヲ再ビ覆マン事ヲ願望スル者アル為ニ給費ヲ与フ可キヤ否ヤヲ議ス (略)

九月二十六日

雨天午前八半出宅大学ニ至ル午後一時半綜理部長ノ集会アリ寄宿舎規則ヲ議ス

このように、出来事についての記述はあるものの、外山の見解が日記から読み取れることは少ないものとなっている。

覚書

日記は和綴じ冊子の罫線に沿って記されている。一方で、その枠外には、覚書と考えられる記録が残されている。例えばそれは、前々太平記について触れられたものである。

聖武天皇御母藤原夫人贈太政大臣淡海不比等ノ御女 前々太平記

神亀二年ニ陸奥蝦夷賊黨征伐ノ宣旨ヲ下賜フル事官軍ノ対象ハ藤原朝臣宇合則不比等ノ三男 前々太平記

古代社会を社会学の立場から論じようと試みたことは、外山が残した草稿、『山存稿』からも伺える。これら草稿のさらに全段階としての研究の覚書であった可能性があるのではないかと。

さらに、新聞記事についてのヘッドラインのようなものが、同様に枠外にみられる。

露清国境 5 / 6 / 83 時事

露国移住人 7 / 6 / 83 報知

枠外という小さい規模での単語の列らであるため、これらについて詳細に触れることはない。そのため、ほぼ覚書としてのみの記述といえる。このように覚書は、日々の記録にも付随して記されているが、それとは別に、とりわけ英語での構想について、和綴じ冊子の背表紙側から書き連ねられていることに着目したい。これらについては、日付が記載されていないため、日記を記していた時期と同一かどうかについては明らかではない。

『日記(日記1)』において、裏表紙側には、日本語と英語の言葉の分析したものがみられる。例えば、双方のオノマトペを列挙したものが多くみられる。

例えば、動物の鳴き声は“Imitation words”とタイトルがつけられている。

Wan-wan=dog

Nya-nya=cat

Hin-hin=horse

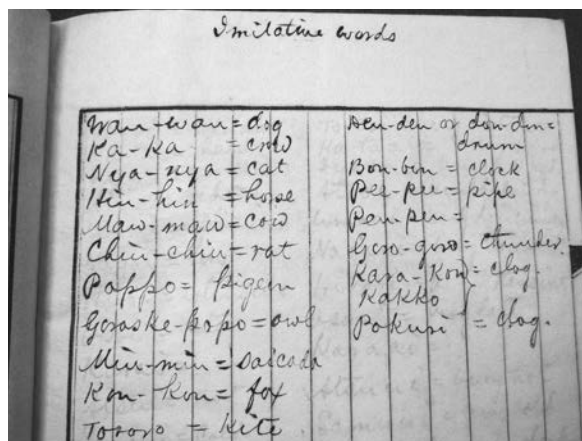
Chiu-chiu=rat

Pappo=pigeon

Geroske-popo=owl

Min-min=saicade (cicadeカ?)

Kon-kon=fox



(『日記1』東京大学総合図書館蔵)

もしくは、日本語の疊語、もしくはは繰り返し言葉をローマ字で記したのも確認できる。

Taka-daka

Kuchi-Guchi

Huru-burushii

Kire-Gire

Hira-Hira

Toki-doki

Reki-reki

Tani-dani

Korewa-korewa

Tsuki-dsuki

Men-men (面々)

Toshi-doshi

Nen-nen

Kami-gami

Hi-bi

Tori-dori

これらに英語訳が付いているわけではないが、ローマ字で記されているということは、外国人へのなんらかの提示のための構想だったのだろうか。もしくは、ローマ字論者でもあった外山のローマ字使用への見解をここに伺うこともできる。ただし、日記においてローマ字表記は見当たらない。

このように、外山の日記からは構想等の覚え書きが見当たっている。これらが後の原稿等にどのようにいかされているのかについては未だ明らかではないが、今後追って論究してみたい。

むすびにかえて

以上、翻刻の経過報告を提示した。前述のように、すべての日記類の整理と翻刻が終了しているわけではない。なお、日記の記された和綴じ冊子の劣化、虫食い状態を考えると、早急な翻刻が必要とも考えられる。そのため、つづけて取り組んでゆきたい。そのうえで、外山の業績、出版物と照らし合わせたうえで検証、解釈を多様に試みたうえで改めて提示してみたい。

(やまぐち りさ：大学史史料室)

受贈図書一覧（抄）（平成22年8月～平成23年1月）

| | |
|--|--|
| アーカイブズ 第41号, 42号 独立行政法人国立公文書館 平成22年9月, 12月 | かわら版 第287号～292号 谷本宗生 平成22年8月～12月 |
| Aoyama Gakuin Archives Letter- 青山学院資料センターだより- 2号, 3号 谷本宗生 平成22年7月, 12月 | 明治三〇年代前半における農村青年会の歴史的- -初期下伊那青年会における教育経験・地域性・修養- 瀬川大 平成22年11月 |
| 赤れんが 第46号 北海道立文書館 平成22年12月 | 関東学院学院史資料室ニュース・レター 第13号 関東学院学院史資料室 平成23年1月 |
| 赤門学友会報懐徳 19号 広報課 平成22年10月 | 勸学院の雀 第173号, 174号 谷本宗生 平成22年10月, 平成22年12月 |
| 井上円了『稿録』の研究/井上円了『稿録』の日本語訳 vol.19 谷本宗生 平成22年9月 | 関東教育学会紀要 第37号 谷本宗生 平成22年10月 |
| 歌うも高し青春譜 谷本宗生 | 記念館だより わだつみのこえ記念館 平成22年7月 |
| 瓜生山学園三〇年史 京都芸術短期大学1977-2001, 京都造形芸術大学1991-2007 京都造形芸術大学三〇年史編纂委員会 平成22年10月 | 教育制度の社会史研究への覚え書き- <教育と社会の学>の課題とのかかわりで- 谷本宗生 |
| 瓜生山学園三〇年史 資料編 京都造形大学三〇年史編纂委員会 平成22年10月 | 教育学研究 第77巻第3号, 第4号 谷本宗生 平成22年9月, 平成22年12月 |
| 江戸東京博物館NEWS vol.71, 72 東京都江戸東京博物館 平成22年9月, 12月 | 教育史学会 会報 No.108 谷本宗生 平成22年11月 |
| 大阪大学文書館設置準備室だより 第7号 大阪大学文書館 平成22年9月 | 京都大学大学文書館だより 第19号 京都大学大学文書館 平成22年10月 |
| 大阪市立大学史紀要 第3号 大阪市立大学大学史資料室 平成22年10月 | 近代日本海外留学の目的変容-文部省留学生の派遣実態について 辻直人 平成22年11月 |
| 東京大学先端科学技術研究センター 2009-2010 東京大学先端科学技術研究センター 平成21年9月 | 慶應義塾福澤研究センター通信 第13号 慶應義塾福澤研究センター 平成22年12月 |
| おしえて! FDマン まんがFDハンドブック【新任教員編】 谷本宗生 平成22年3月 | 工学院大学学園一二五年史資料ニュース 第三号 工学院大学創立125周年記念事業事務局 平成22年7月 |
| 開港のひろば 第110号, 111号 横浜開港資料館 平成22年10月, 平成23年2月 | 渋沢研究 第23号 渋沢史料館 平成23年1月 |
| 学院史料 第二十四号 神戸女学院史料室 平成22年10月 | 神宮皇學館大學-昭和十五年～昭和二十一年- 第六回 (学) 皇學館 館史編纂室 平成22年10月 |
| 学生寄宿舎の世界と渋沢栄一～埼玉学生誘掖会の誕生～ 渋沢史料館 平成22年10月 | 1880年代教育史研究会ニューズレター 第31号, 32号 谷本宗生 平成22年10月, 平成23年1月 |
| 霞城館だより No.51 財団法人霞城館 平成23年1月 | 一八八〇年代教育史年報 第二号 一八八〇年代教育史研究会 平成22年10月 |

| | | | |
|--|-------------------|---|-------------------|
| 続・近代日本教育会史研究 谷本宗生 | 平成22年11月 | 同窓会通信（一高同窓会会報後継誌）第3号, 4号 一高同窓会 | 平成22年7月, 平成22年11月 |
| 大学アーカイヴズ No.43 全国大学史資料協議会東日本部会 | 平成22年11月 | 日本教育史往来 No.187～189 谷本宗生 | 平成22年9月～平成23年1月 |
| 大学史研究通信 第63号, 64号 谷本宗生 | 平成22年9月, 平成22年10月 | 日本教育史研究 第二九号 谷本宗生 | 平成22年9月 |
| 大学史の社会的使命-2009年度全国研究会の記録 於：國學院大學- 第11号 谷本宗生 | 平成22年10月 | 帝国大学総長渡邊洪基君寄贈 奥国ポッテンドルフ木綿紡織標本写真他9点 宇都宮大学教育学部 丸山剛史 | |
| 大学病院医療情報ネットワーク-十年の歩み 平成11年6月 東京大学医学部附属病院大学病院 医療情報ネットワーク研究センター 木内貴弘 | | 大学病院医療情報ネットワーク二十周年記念誌 東京大学医学部附属病院大学病院 医療情報ネットワーク研究センター 木内貴弘 | 平成21年1月 |
| 大東文化歴史資料館だより 第9号 谷本宗生 | 平成22年11月 | 日本の教育史学 第53集 谷本宗生 | 平成22年10月 |
| 拓殖大学百年史 大正編 拓殖大学創立百年史編纂室 | 平成22年7月 | 日本の大学-その設立と社会- 全国大学史資料協議会東日本部会・谷本宗生 | 平成22年9月 |
| 玉川大学教育博物館 紀要 第8号 玉川大学教育博物館 | 平成22年8月 | 信綱と坂田富美-温情のもとに秘書・門人として- 佐佐木信綱記念館 | 平成22年11月 |
| 地方史研究 第三四六～三四八号 谷本宗生 | 平成22年8月～12月 | 武士の近代-1890年代を中心とした金沢士族- 谷本宗生 | 商経論叢45-4号 |
| 東北大学史料館だより 東北大学学術資源研究公開センター史料館 | 平成22年9月 | 北陸史学 第五十七号 谷本宗生 | 平成22年7月 |
| 東海大学学園史ニュース No.5 東海大学学園史資料センター | 平成22年12月 | 立命館大学国際平和ミュージアムだより VOL.18- 1, 2 立命館大学国際平和ミュージアム | 平成22年9月, 12月 |
| 東海大学キャンパス物語No.1-3 清水・代々木・湘南編 (図録) 東海大学学園史資料センター | 平成22年7月 | <学位論文> 東京工業大学における戦後大学改革に関する歴史的研究 谷本宗生 | 平成17年2月 |
| 東京大学大学院教育学研究科心理教育相談室年報 第5号 谷本宗生 | 平成22年9月 | 寮に吹く嵐 谷本宗生 | |
| 『金原省吾日記』昭和二十二年-昭和二十五年 第八集 谷本宗生 | 平成22年12月 | 関東教育学会紀要 第37号 谷本宗生 | 平成22年10月 |

史料室日誌抄録（平成 22 年 8 月～平成 23 年 1 月）

- 8月2日（月）、3日（火）、19日（木）
谷本室員、教育学部60年史編纂打合せ出席。
- 8月31日（火） 東北大学史料館より、寄贈史料受取。
- 10月1日（金） 谷本室員、大学渉外活動に関する相談対応。
- 10月13日（水）～10月14日（木）
谷本室員、科研費調査のため出張（京都大学）。
- 10月19日（火） 谷本・山口室員、地域博物館所蔵の地域史料の展示見学（神戸市立博物館）。
- 11月4日（木） 大学院情報学環・学際情報学府教授 吉見俊哉室長着任。
- 11月9日（火）～11月11日（木）
谷本室員、科研費調査のため出張（新潟）。
- 11月12日（金） 『東京大学史史料室ニュース』第45号刊行、発送。
- 11月16日（火）～11月17日（水）
谷本室員、科研費調査のため出張（東北大学）。
- 11月24日（水）～11月26日（金）
谷本室員、科研費調査のため出張（九州大学）。
- 11月30日（火） 東京外国語大学院生（2名）、アーカイブ業務の相談のため来室。
- 12月2日（木） 吉見室長・広報課長・総務課長らと打合せ（総務部）。
- 12月18日（土） 谷本室員、教育史学会編集委員会出席（文科省）。
- 1月20日（木） 小川室員、加藤弘之目録刊行の相談打合せ。
- 1月28日（金） 谷本室員、指定施設についての打合せ（本部総務課）。

この間の閲覧者数

学内者 6名
学外者 33名

主な学外閲覧者所属機関

茨城県庁、岩波書店、宇都宮大学、エジンバラ大学、京都大学、近畿大学、専修大学、
中央大学大学院、東北大学、日本大学

その他

文献撮影・複写許可件数 17件
調査（照会）件数 54件

題字 森 巨元総長

東京大学史史料室ニュース 第46号

発行日：2011年3月31日（年2回発行）

編集・発行：東京大学史史料室

東京都文京区本郷7-3-1

電話：03（5841）2077（直）

印刷所：株式会社 ワーナー

Archives Section of the University of Tokyo

千葉県稲毛区六方町13-2